

制御適合が学習に関する動機づけに及ぼす影響ⁱ

長谷川 孝治（信州大学人文学部）・高橋 雄佑（信州大学人文学部ⁱⁱ）

The effect of regulatory fit on learning motivation

Koji HASEGAWA (Faculty of Arts, Shinshu University)

Yusuke TAKAHASHI (Faculty of Arts, Shinshu University)

要 約

The purpose of this study is to test whether regulatory fit between predominant focus and framing of learning would enhance one's motivation for learning. Based on the regulatory focus theory, we predicted that people who are oriented toward promotion focus would get motivated if they focused on the benefit of learning about the subject. On the other hand, people who had a prevention focus would become prompted when primed by the cost of not learning. It was predicted that promoting fit between orientation and framing would lead to intrinsic motivation. In contrast, preventing fit would lead to extrinsic motivation. As a result, we found marginal interactions in the intrinsic and identified regulation. On the intrinsic motivation, people who had promotion orientation when they thought about the benefit of getting a credit in their course were higher than when they recalled the cost of not getting it. Moreover, when people thought about the benefit, those who are oriented toward promotion get motivated on the intrinsic level more than those who are oriented toward prevention. The same pattern of interaction emerged in the identified motivation. Additionally, we found a significant interaction on the study time. The result was that, people who had promotion orientation when they thought about the benefits tended to study for the exam longer than when they recalled the costs. These results suggest that it is important for enhancing intrinsic motivation to create a fit between regulatory focus and priming of benefit.

Keywords : regulatory fit, promotion focus, prevention focus, self-determination theory, learning motivation

ⁱ 本論文は、第2著者が作成した社会心理学特殊実験レポート（2014年度）のデータを、指導教員である第1著者が再分析してまとめたものである。また、本論文の内容は、The 6th International Conference on Self-Determination Theory (Jun.3, 2016, Victoria, Canada)において学会発表を行った内容を基にしたものである。

ⁱⁱ 現所属 株式会社 学究社

問 題

人が目標を達成するためには、目標に向かって努力し、課題を実行するだけでなく、つい怠けてしまう自分を律する必要がある。このように目標達成のために目標に沿った行動をすべく、自身の行動を調整することを自己制御という。この自己制御の前提となる基本原理は、人は快に接近し、不快を回避するという快樂原則である（尾崎・唐沢, 2011; 2012）。この快樂原則に関して、Higgins (1998) は、快への接近方法と不快を回避する方法が重要であるとし、制御焦点理論 (Regulatory Focus Theory) を提唱した。制御焦点理論では促進焦点 (promotion focus) と予防焦点 (prevention focus) という2つのモードがあるとされており、前者の促進焦点は利得があることを快とし、利得がないことを不快として認識し、後者の予防焦点は損失がないことを快とし、損失があることを不快として認識するとされる。具体的にいえば、促進焦点は利得を追い求め、利得がないことを避けようとする志向性を示し、予防焦点は損失がない状況を追い求め、損失がある状況を避けようとする志向性を示す。また、尾崎・唐沢 (2011) によると、この促進焦点のときに示される志向性は利得接近志向、予防焦点の時に示される志向性は損失回避志向とされる。そして、促進焦点が活性化している人は目標を理想として認識するため、精いっぱい努力し最大の結果が得られるように行動を制御するが、予防焦点が活性化している人は目標を義務として認識するため、やらなければならない最低限度の結果が得られる程度に行動を制御するとされている。

このように、どちらの制御焦点が活性化しているかによって示される個人の志向性は異なる。では、それぞれの志向性はどのような時により行動へと結びつくのだろうか。Higgins (2000) によれば、人は活性化している制御焦点と同じ状況要因を与えられたときに、より行動しようとする とされる。すなわち、自己制御に関する志向性と状況が適合している、制御適合 (regulatory fit) の状態にあるときに、人は動機づけを高め、行動すると考えられるのである。参加者にある商品を購入するか否かを決定させる実験では、商品を評価する時に、促進焦点が活性化している人は、商品を得ることによる利益に着目させると、高額商品でも受け入れたのに対し、予防焦点が活性化している人には、商品を失うことによる不利益に着目させた方が高額商品を受け入れるという結果が示されている (Higgins, Idson, Freitas, Spiegel, & Molden, 2003)。また、Shar, Higgins, & Freidman (1998) は、参加者にアナグラム課題を行わせる実験を行い、促進焦点 (課題を解くことで報酬が得られる) 状況では、特性として促進焦点を持つ参加者がより多くの課題を解くのに対して、予防焦点状況 (課題を解かないと報酬を失う) では、特性として予防焦点を示す参加者がより多くの問題を解くことを示した。さらに、市原 (2016) は、学業援助要請に対する制御適合の効果について、大学生に対する調査によって検討した。具体的には、高校時代に数学の授業で苦手だったことを想起させ、その際、友人や教師に援助要請をした頻度と、要請した (あるいはしなかった) 理由を尋ね、数学に対する有能感や興味との関連を検討した。その結果、自己制御スタイルと援助要請の方略が適合した場合に、数学に対する有能感や興味が高いことが示された。このように、さまざまな領域において、制御焦点の特性と状況との適合が動機づけや行動に影響を与えることが示されている。これらの先行研究に基づき、本研究は、学習に関する動機

づけに対する制御適合の効果を検討することを目的とする。市原（2016）では、学習に対する興味が制御適合によって促進されることを示した。しかしながら、想起法による調査研究で得られた知見であるため、因果関係が明確でない。本研究では、制御焦点を特性として測定するとともに、プライミングによって操作し、その後の動機づけを測定することで因果関係を明確化する。

また、本研究では、学習に関する動機づけの状態について、より詳細に分析するために、Deci & Ryan（2000）の自己決定理論（Self-Determination Theory）に基づいた検討を行う。先行研究では、動機づけに関して興味に関する単項目で測定していた（市原，2016）。しかしながら、実際には、勉強内容そのものが楽しいために興味を持ち、学習に動機づけられる場合もあれば、先生が好きだから学習したいという場合もあるだろう。自己決定理論では、このような動機づけのレベルを、自己決定性の程度に基づいて区別する。具体的には、自己決定性の低い非動機づけから始まり、外的動機づけ、取り入的動機づけ、同一化的動機づけ、統合的動機づけ、内発的動機づけと自己決定性のレベルが高くなる（岡田，2010）。非動機づけはまったく動機づけられていない状態であり、その後の統合的動機づけまでは外発的な動機づけの下位分類である。外的動機づけは、報酬の獲得や罰の回避などの外的な要因によって動機づけられている状態である。取り入的動機づけは、その活動に関する価値の内在化がある程度生じ、外的要因がなくても動機づけられるけれども、恥や不安など自己価値を守るために行動が生じている状態である。同一化的動機づけは、その活動の価値と自己を同一化し、自律的に行動する状態であり、統合的動機づけはこの状態がより進み、他の目標との間の矛盾もなく、統合された状態であるとされる。さらに、内発的動機づけは、活動そのものを楽しむために動機づけられていることを示す概念である。この理論に基づいた動機づけを測る尺度として、Self-Regulation Questionnaire（SRQ）がある（Ryan & Connell，1989）。この尺度やその後開発された尺度は、外的動機づけ、取り入的動機づけ、同一化的動機づけ、内発的動機づけの4下位尺度からなる（速水・田畑・吉田，1996；高山，2009）。本研究でも同様に、速水ら（1996）の学習動機づけ尺度を基にして、4つの下位尺度からなる動機づけ尺度を作成し、検討に用いる。このことによって、勉強するのが楽しいから学習するのか、あるいは先生に言われるから渋々学習するのかを区別し、多面的に動機づけをとらえることができる。さらに、本研究では、学習動機づけが高まった結果として、実際にどの程度学習したのかという学習時間についても焦点を当てる。どのレベルの動機づけでも学習時間は高まると考えられるが、実際に動機づけが行動として現れたかどうかの傍証になると考えられる。

以上の議論に基づき、本研究では制御焦点に伴う志向性が利益あるいは不利益に着目することによって学習動機づけと学習時間にどのような影響を及ぼすのかについて検討する。利得接近志向の人は学習することの利益に着目した時、動機づけが強まるだろう。この際、利得接近志向の人は、学習すれば得られる利益に注目し、内発的動機づけや同一化的動機づけのような自己決定性の高い動機づけが強まると考えられる。また、利得接近志向の人は利益に着目した時、学習時間が増えるだろう。これは学習動機づけが高まることによって学習時間も増えると考えられるためである。これに対して、損失回避志向の人は、学習しないことによる不利益に着目した時、動機づけが強まるだろう。この際、損失回避志向の人は、学習

しないと被る不利益に注目し、それを回避しようするために、取り入れの動機づけや外的動機づけなどの自己決定性の低い動機づけが強まると考えられる。また、このような動機づけの高まりに対応して、損失回避志向の人は不利益に着目した時、学習時間が増えるだろう。

これらの予測を検討するために、本研究では、大学の講義内で課される小テストのための学習をすることで得られる利益か、あるいは学習しないことで被る不利益をそれぞれ自由記述してもらうことによって、利益あるいは不利益に着目させるプライミング操作を用いた。これは Higgins et al (2003) の方法を質問紙調査に合うように改変したものである。また、利益に着目させた条件を利益フレーム、不利益に着目させた条件を不利益フレームと本研究では呼ぶ。仮説は以下のとおりである。

仮説

1. 利益に着目した時、利得接近志向の人は、損失回避志向の人に比べて、自己決定性が高い動機づけ（内的動機づけや同一化的動機づけ）が強まるだろう。
2. 不利益に着目した時、損失回避志向の人は、利得接近志向の人に比べて、自己決定性が低い動機づけ（取り入れの動機づけや外的動機づけ）が強まるだろう。
3. 利益に着目した時、利得接近志向の人は損失回避志向の人に比べて、学習時間が増えるだろう。
4. 不利益に着目した時、損失回避志向の人は利得接近志向の人に比べて、学習時間が増えるだろう。

方 法

調査の概要と調査参加者

心理学関連の授業において、2014年12月に、2週間後に小テストを行うことを通知し、その小テストに関する事柄を含め、大学生の学習に関する調査（第1回調査：以下、Time 1）を行った。小テストは、それまでの授業で学習した心理学用語について、多肢選択式の回答を求める形式で10問程度出題されると予告され、自主学習用に重要用語リストが配布された。2週間後に実施された小テストの後に、試験勉強に関する事柄を含め、第2回調査（以下、Time 2）をパネル調査の形式で行った。2回の調査ともに回答した大学生100名（男性37名、女性63名）を分析対象とした。参加者のTime 1時点の平均年齢は、20.00歳（ $SD=1.15$ ）であった。

質問紙の構成

1. 学習することによる利益としないことによる不利益に関するフレーミング

参加者に試験に向けて勉強することによって得られる利益か、あるいは勉強しないことによって被る不利益に着目してもらうため、本研究では次のような自由記述を行わせる質問紙を2種類用意し、ランダムに配布した。

利益に着目させる条件では、「あなたはこの授業で行われる小テストのために自主学習をすることで、どのような利益を得ることができると思いますか。思いつくことを、最低5つ以上お書きください。」という教示を行い、箇条書きの欄を設け、そこに自由記述を行って

もらった。**不利益に着目させる条件**では「あなたはこの授業で行われる小テストのための自主学習をしないことで、どのような不利益をこうむると思いますか。思いつくことを、最低5つ以上お書きください。」という教示を与え、同様に自由記述させた。

ここで、損失ではなく不利益という言葉を用いたのは、学業場面においては損失よりも不利益の方が適切であると判断したためである。

この自由記述以外の、以下の尺度は、両条件で同一であった。

2. 分析に用いた尺度

(1) 利得接近志向・損失回避志向 (Time 1)

尾崎・唐沢 (2011) によって作成された PPFs (Promotion/prevention focus scale) 邦訳版を用いた。この尺度は制御焦点理論に基づく志向性である、利得接近志向・損失回避志向を測る尺度である。この尺度は利得接近志向・損失回避志向それぞれ8項目からなる16項目で構成されている。利得接近志向の項目例としては、「どうやったら自分の目標や希望をかなえられるか、よく想像することがある」などであり、損失回避志向の項目例としては、「私にとっては、利益を得ることよりも、損失を避けることの方が大事だ」がある。調査参加者は、「1. 全くあてはまらない」から「7. 非常にあてはまる」までの7件法で評定した。

(2) 小テストへの学習動機づけ尺度 (Time 1)

速水・田畑・吉田 (1996) の学習動機づけ尺度を参考に28項目からなる小テストへの学習動機づけ尺度を作成した。「あなたはこの講義での小テストに向けてどのような理由でテスト勉強しますか。最もあてはまる数字に○印をつけてください。」という教示に対して、調査参加者は、「1. まったくあてはまらない」から「5. いつもあてはまる」までの5件法で評定した。

(3) 小テストに関する勉強時間 (Time 2)

Time 2では、小テストのためにどれくらい勉強したかについて、Time 1から2週間で何時間勉強したかを空欄に数字を書き入れる形で回答を求めた。

結 果

PPFS について因子分析 (最尤法・プロマックス回転) を行い、共通性が .250未満の2項目を削除し、14項目で再度因子分析を行った。その結果、先行研究と同様に、利得接近志向6項目 ($\alpha = .824$) と損失回避志向8項目 ($\alpha = .824$) からなる2因子解が得られた。各因子に含まれる項目を合計し、項目数で除した平均得点を算出した。各得点が高いほど、それぞれの志向性が高いことを示す。

次に、小テストへの学習動機づけ尺度に関して、速水・田畑・吉田 (1996) の尺度構成と同じ因子構造であることを確認するために、確認的因子分析 (最尤法) を行った。共通性が .250未満の8項目を削除し、20項目で再度因子分析 (最尤法) を行った結果、 $\chi^2(164) = 288.92$, $CFI = .869$, $RMSEA = .089$ となり、 χ^2 値が有意であるけれども、CFI, RMSEA共に一定の適合度を示したため、先行研究と同様の4因子解が妥当であると判断した (表1)。それぞれの因子名は先行研究と同様に、第1因子から外的動機づけ、取り入れの動機づけ、同一化的動機づけ、内発的動機づけとした。各因子に含まれる項目を合計し、項目数

表1 学習動機づけ尺度の確認的因子分析（最尤法）による因子負荷量と因子間相関

項目	I	II	III	IV
I. 外的動機づけ ($\alpha = .813$)				
勉強しないと親がうるさいから	.753	.000	.000	.000
悪い成績をとると親が怒るから	.928	.000	.000	.000
II. 取り入的動機づけ ($\alpha = .724$)				
テストで良い点数をとることで先生に良い学生であると思っしてほしいから	.000	.656	.000	.000
テストで悪い点数をとって親を悲しませたくないから	.000	.587	.000	.000
友人たちにかしこいと思われたいから	.000	.628	.000	.000
テストで悪い点数をとることで、みんなに嫌われたくないから	.000	.707	.000	.000
III. 同一化的動機づけ ($\alpha = .864$)				
勉強しておくべき大切な内容だから	.000	.000	.623	.000
テスト範囲の内容について知りたいから	.000	.000	.656	.000
テスト範囲の内容が毎日の生活で必要なことだと思うから	.000	.000	.571	.000
知識を得ることで幸せになれるから	.000	.000	.668	.000
勉強内容が将来役に立ちそうだから	.000	.000	.785	.000
広い意味での学力を高めることだから	.000	.000	.723	.000
理解したい大切な内容だから	.000	.000	.807	.000
IV. 内発的動機づけ ($\alpha = .890$)				
テスト範囲の内容が面白いから	.000	.000	.000	.630
わかるようになるのがうれしいから	.000	.000	.000	.811
むずかしいことをやってみることが楽しいから	.000	.000	.000	.590
できるようになることが楽しいから	.000	.000	.000	.816
考えることが好きだから	.000	.000	.000	.718
知識が増えることが楽しいから	.000	.000	.000	.892
わからなかったことがわかるようになると自信がつくから	.000	.000	.000	.701
	I	.585	-.047	-.152
	II		.086	.000
	III			.845

で除した平均得点を算出した。各得点が高いほど、それぞれの動機づけが高いことを示す。

仮説の検討のため、学習に関する動機づけに対して、自己制御志向性（利得接近・損失回避）×フレーミング（利益・不利益）の分散分析を行った。志向性に関しては、利得接近志向性得点から損失回避志向性得点を引き、算出された値が正の値であれば促進焦点が優勢な利得接近志向の個人、負の値であれば予防焦点が優勢な損失回避志向の個人として分類した。両要因ともに参加者間要因である。各セルの平均値と標準偏差を表2に、各要因の主効果、交互作用に関するF値と有意性を表3に示す。

内発的動機づけに対して、志向性の主効果が有意傾向であり、利益接近志向の参加者の方が、損失回避志向の参加者よりも内発的動機づけ得点が高かった。また、フレームの主効果も有意であり、利益接近志向の参加者の方が、損失回避志向の参加者よりも内発的動機づけ得点が高かった。さらに、交互作用が有意傾向であったため、下位検定を行った。その結果、

表2 自己制御志向性×フレーミングの各セルの平均値と標準偏差

	利得接近志向		損失回避志向	
	利得フレーム (N=14)	損失フレーム (N=24)	利得フレーム (N=20)	損失フレーム (N=38)
内発的	4.19 a (0.80)	3.27 b (0.85)	3.61 b (0.56)	3.25 (0.71)
同一化	3.93 a (0.87)	3.34 b (0.80)	3.42 b (0.42)	3.41 (0.66)
取り入れ	2.32 (0.82)	2.04 (0.82)	2.61 (0.66)	2.53 (0.98)
外的	1.64 (0.91)	1.58 (0.67)	1.90 (0.91)	1.84 (0.89)
勉強時間	1.46 (0.78)	1.19 (0.40)	1.11 (0.32)	1.39 (0.72)

Note. () 内は標準偏差.

勉強時間のみ Time 2に測定. 異なるアルファベット間は有意な差がある.

なお, 各セルの N は, 欠損値処理のため従属変数ごとにわずかに異なる.

表3 学習動機づけと勉強時間に対する志向性とフレーミングの効果 (数値は F 値)

	内発的	同一化	取り入れ	外的	勉強時間
志向性	3.42 †	2.06	4.22 *	1.96	0.35
フレーム	15.61 **	3.89 †	0.93	0.10	0.00
交互作用	3.04 †	3.60 †	0.26	0.00	4.23 *

† $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$

利得フレーム条件では, 利得接近志向の人が損失回避志向の人よりも, 内発的動機づけが有意に高かった ($p < .05$)。また, 利得接近志向の人は, 損失フレーム条件よりも利得フレーム条件の方が, 内発的動機づけが有意に高かった ($p < .01$)。

同一化的動機づけについても, ほぼ同様の結果が示された。フレームの主効果と交互作用が有意傾向を示した。交互作用についての下位検定の結果, 利得フレーム条件では, 利得接近志向の人が損失回避志向の人よりも, 同一化的動機づけが有意に高かった ($p < .05$)。また, 利得接近志向の人は, 損失フレーム条件よりも利得フレーム条件の方が, 同一化的動機づけが有意に高かった ($p < .05$)。これらの結果は, 仮説1を支持するものであった。

取り入乐的動機づけについては, 志向性の主効果のみが有意であった。損失回避志向の人の方が, 利得接近志向の人よりも取り入乐的動機づけが高かった。外的動機づけについては, 主効果も交互作用も有意ではなかった。これらの結果は, 仮説2を支持しなかった。

試験までに行った勉強時間については, 分布の状態から判断して, 0~3時間未満を1点, 3時間以上6時間未満を2点, 6時間以上を3点として得点化した。この得点に対して, 同様の2要因の分散分析を行ったところ, 表2に示されるように, 交互作用のみが有意であった。下位検定の結果, 単純主効果は有意な水準に至らなかったものの ($p = .096$), 利得フ

フレーム条件において、利得接近志向の人は、損失回避志向の人よりも勉強時間が長かった。これらの結果は、仮説3を一部支持するものの、仮説4を支持しなかった。

考 察

本研究の結果、Higgins (2000) の自己制御理論における制御適合で想定されるように、利益に着目した場合、利得接近志向の人は損失回避傾向の人よりも、内発的動機づけと同一化的動機づけが高く、より高次のレベルで動機づけられることが明らかになった（仮説1支持）。具体的にいえば、大学生が授業の成績評価の一部となる小テストのために勉強する時、特性としての促進焦点が優勢な人が、学習がどのような利益を生むかに着目することによって、勉強することの価値を重視し、勉強そのものが楽しいという形で動機づけられたということである。また、利益に着目した利得接近志向の人は、損失回避傾向の人に比べて、長く勉強していた傾向が示された（仮説3一部支持）。この結果は、上述の動機づけの結果が、自己報告とはいえ、実際の行動に結びついていたことを示唆する。これらの結果は、制御適合が学習への興味を高めることを示唆する先行研究の知見（市原, 2016）について、より詳細な証拠を提示し補強するものであるといえる。すなわち、制御適合が学習への興味を高めるだけでなく、内発的な動機づけを促進し、学習行動を生起させることを示す知見であるといえる。

しかしながら、本研究の結果は仮説2と4を支持するものではなかった。すなわち、損失に注目した場合、損失回避志向の人は利得接近志向の人よりも、外的にも取り入れ的にも動機づけられることはなかった。表2に示したように、取り入れ的動機づけに関しては、志向性の主効果が有意であり、状況にかかわらず、損失回避志向が高い人の方が、利益接近志向が低い人よりも取り入れ的動機づけが高いことが示された。この結果はどのように解釈すべきであろうか。ひとつには損失回避志向が高い人は、小テスト2週間前では時間がまだあると考え、動機づけが高まらず、非動機づけの状態のままであった可能性がある。制御適合の観点からすれば、損失回避志向の人が損失に注目をすると、動機づけが高まり、行動が生起すると考えられるが、今回の課題やプライミング操作では予防焦点を活性化させるまでの強度が足りなかったのかもしれない。勉強時間の結果（表2および3参照）は、このような解釈の傍証となりうる。損失フレーム条件において、損失回避志向の人は、利得接近志向の人よりも（単純主効果は有意ではないけれども）わずかに長く勉強していた。この結果は、2週間前には活性化しなかった予防焦点が、試験直前に締め切り効果によって高められ、その結果として損失回避傾向の人を勉強させた可能性がある。あるいは、説得研究におけるスリーパー効果（Hovland, Janis, & Kelley, 1953）と類似した結果が生じたとも解釈できる。小テスト2週間前には現実的ではなかった勉強しないことによる損失が、時間が経ってから思い出され、勉強に駆り立てたのかも知れない。これらの解釈について検証するためには、時間をより細かく分けた実験室実験などによって、より詳細な検討が求められる。

以上のように、本研究で得られた知見は、従来別々の文脈で研究されてきた自己制御理論（Higgins, 2000）と自己決定理論（Deci & Ryan, 2000）を統合する新たな視点を提示するものであるといえる。特に、促進焦点に関して、特性と状況的な活性化が適合する場合には、

行動が生起するだけでなく、それが内発的な動機づけに下支えされたものであることが示された。このように促進焦点における制御適合が内発的動機づけを高めるのに対して、予防焦点における制御適合が必ずしも明確な動機づけ効果を示さなかったことは、課題の性質にも関与するかもしれない。本研究の学習場面は、参加者が比較的興味を持ちやすく、内発的動機づけが高まりやすい状況であった可能性がある。これは、特性として予防焦点の高い人が、利得・損失のフレームに関わらず、取り入れ的な動機づけが高いとはいえ、全体的に平均値は中央値の3よりも低いものに対して、内発的動機づけは中央値の3よりも高かったこと（表2参照）からも伺える。今後、先行研究（市原，2016）のように、参加者が比較的苦手な科目で本研究と同様の検討を行った場合には、予防焦点における制御適合が外的な動機づけを高めるかどうかを検討する必要がある。

最後に、本研究の限界を述べる。本研究では、勉強時間を自己報告によって、数字で記述することによって評定していた。自己報告のため、正確性が低くなるだけでなく、数字で記入させたため分布が偏り、最終的に3点尺度化することによって統計的に処理可能な得点に変換した。しかしながら、このことによって統計的に有意な交互作用効果が生じていても、下位検定では有意にならないという結果が示された可能性がある。このような結果が生じたのは参加者の人数が少なかったという理由も考えられ、今後より精緻な勉強時間の評定の仕方を工夫する必要がある。さらに、同じ3時間の勉強時間でも、試験直前に一気に勉強した場合と、6日前から30分ずつ勉強した場合には、学習内容やそれを引き起こす動機づけ内容も異なると考えられる。したがって、今後、どのようなタイムスケジュールで勉強を進めたかを測定することによって、制御適合と自己決定過程とのより詳細な関係を明らかにできると思う。

引用文献

- Deci, E. L., & Ryan, R. M. (2000). The “what” and “why” of goal pursuits: Human needs and the self-determination of behavior. *Psychological Inquiry, 11*, 227-268.
- 速水敏彦・田畑治・吉田俊和（1996）．総合人間科の実践による学習動機づけの変化 名古屋大学教育学部紀要, 43, 23-35.
- Higgins, E.T. (1998). Promotion and prevention: Regulatory focus as a motivational principle. In M.P.Zanna (Ed.), *Advances in experimental social psychology, 30*, New York: Academic Press. Pp. 1-46.
- Higgins, E.T. (2000). Making good decision: Value from fit. *American psychologist, 55*, 1217-1230.
- Higgins, E.T, Idson, L.C., Freitas, A.L., Spiegel, S., & Molden, D.C. (2003). Transfer of value from fit. *Journal of Personality and Social Psychology, 84*, 1140-1153.
- Hovland, C. I, Janis, I L. & Kelley, H H. (1953). *Communication and persuasion: psychological studies of opinion change*. New Haven, CT: Yale University Press.
- 市原 学 (2016). 学業的援助要請における制御適合 都留文科大学大学院紀要, 20, 73-84.
- 岡田 涼 (2010). 自己決定理論における動機づけ概念間の関連性—メタ分析による相関係数の統合 パーソナリティ研究, 18, 152-160.
- 尾崎由佳・唐沢かおり (2011). 自己評価に対する評価と接近回避志向の関係性—制御焦点理論に基づく検討— 心理学研究, 82, 450-458.

- 尾崎由佳・唐沢かおり (2012). 自己評価と接近回避志向：制御焦点の活性化による相関関係の変化 対人社会心理学研究, 12, 59-65.
- Ryan, R. M., & Connell, J. P. (1989). Perceived locus of causality and internalization : Examining reasons for acting in two domains. *Journal of Personality and Social Psychology*, 57, 749-761.
- Shah, J., Higgins, E. T., & Friedman, R. S. (1998). Performance incentives and means : How regulatory focus influences goal attainment. *Journal of Personality and Social Psychology*, 74, 285-293.
- 高山草二 (2009). 動機づけとストレス反応における文化的自己観の影響 島根大学教育学部紀要, 43, 61-65.

(2016年10月31日受理, 12月13日掲載承認)